

外国人住宅 7 号館とニュートン先生の思い出

平 松 さやか

2020 年 8 月に外国人住宅 7 号館が、残念ながら西隣の 2 棟（8 号館、9 号館）とともに取り壊されてしまったことは、まだ関西学院の関係者にもあまり知られていないのではないかと思います。世の中全体がコロナ禍にあり、上ヶ原のキャンパスもまったく人気を感じられないままに、いつの間にかこの館も 91 年でその役目を終えた。しかし、長い間（1988～2004）この館の住人であったジュディス・ニュートン先生（Judith May Newton, 1939～2011）の暖かい雰囲気とともに、当時のことは今なお私の記憶に刻まれている。

今を遡ること 30 年、1991 年の大学入学から私と関西学院のお付き合いが始まった。米国留学の夢を抱き、文学部英文学科（現在の文学言語学科）の門を叩いた私は、学科内で唯一のネイティブスピーカー教員であったニュートン先生の授業を選択することにした。先生は文学史やライティングをご担当されていたが、宣教師という立場でもあったので、讃美歌をまず学生全員で歌ってから授業を始めるスタイルを貫いておられた。また、イングリッシュ・チャペルでは、聖書についてというよりも、様々なゲストを招かれ、その方にお話を伺うことも多かった。ごく普通の仏教家庭に育った自分自身の人生のなかで、「関西学院＝ミッションスクール」を初めて体感した日々だった。

私は、大学 2 年時に交換留学の夢を叶え、その後は関学の大学院に進学した。大学院は学生数が少ないこともあり、教授と院生の関係が自然と密になる。その頃から、ニュートン先生のお宅には様々な用事を含め、何十回と足を運んだ。文学部本館裏の道を抜け、細い公道沿いに広い庭付きの、2 階建ての素朴な外国人住宅が立ち並んでいた。こげ茶色の観音開きの木の扉を開け、少し薄暗い玄関を抜けると、台所内のテーブルにまで、所狭しと先生ご専門のチャーサーやアリス・ウォーカーの小説などが溢れかえっていた。数々の書類が山積みになれ、紙袋やカバンも足の踏み場がないほどあちこちにあったのが、この家の日常…。決して整頓されたとは言い難かったが、大きなソファに腰掛けると、窓から高い木々が見え、庭の鳥のさえずりも聞こえるこのお宅が私は好きだった。なぜか外界からも、キャンパスからも遮断されたように感じ、私はいつも不思議と落ち着くことができた。

非常に鮮明な記憶として焼き付いているのは、その乱雑なキッチンに備え付けのオーブンで焼いた、ニュートン先生お手製のターキーの丸焼き。それを頂きながら大学院の授業を行うのだが、その香りと食欲に負けて、講義の内容は殆ど入ってこなかった。また、クリスマスの時期には、大学院生たちがそれぞれ好みのおかずを持ち込み、potluck パーティをすることも恒例であった。時にはアメリカからはるばると来訪された先生のお母様も同席されての授業もあった。（今思えば、なんと自由なスタイル！）

先生は 1 階に一人でお住まいであったのだが、いつ、どんな方でも訪ねて来られるように、あえて表の木の扉に鍵を掛けておられなかった。白い壁の館は、天井に電灯がなかった。代わりに、濃い黄色みを帯び



ニュートン先生と大学院の教え子（1999 年 1 月 12 日）
左から 2 人目が筆者

た白熱球のスタンドランプが幾つも置かれていて、室内は柔らかい光に覆われていた。そして、先生の朗らかな歌声と学生のおしゃべりで溢れていた。外国人住宅 7 号館での居心地の良さと、ニュートン先生の優しさに甘えて、遅い時間帯まで長居していた。授業内容はもちろん、他愛もない話が弾んだことも、つい昨日のことのよう思い描くことができる。

【文学部非常勤講師】



外国人住宅 7号館(2012 年)



7号館のベルシェ先生ご一家と 9号館のブレイ先生ご一家

1953 年から翌年にかけて、外国人住宅 7 号館にお住まいだったのはベルシェ先生 (Francis B. Belshe、文学部で教育学史、米国思想史を担当) ご一家です。そのご長女アン・ケネディさん (Ann Kennedy) が 2014 年秋にミズーリ州から 60 年ぶり来日され、関西学院を訪問されました。

その時撮影された玄関前に佇むアンさんの写真をご覧ください。アンさんは、その 61 年前に同じ玄関前でお兄様のボブさんと一緒に撮った写真を見せてくださいました。

その頃、9 号館にはブレイ先生 (W.D. Bray、時計台前のヒマラヤ杉の電飾を始めたアメリカ人宣教師。1953 年から 80 年まで神学部で教えた) とそのご家族が住んでおられました。アンさんのお母様が残された日記によると、ボブさんは、ブレイ家のご長男ジムさんと一緒に幼稚園に通っていたそうです。そして、1954 年にご一家がアメリカに帰国された時、ブレイ先生ご一家は神戸港まで見送りに来てくださったそうです。

【上】アン・ケネディさん (2014 年秋)
【下】ボブさん、アンさんご兄妹
(1953 年秋)



【左】ベルシェ夫人
【右】ブレイ夫人

私はジム・ブレイさんに 2 度お会いしたことがあります。最初は、2004 年に創立者ランバスの生誕 150 年を記念し、関西学院で様々なイベントが行われた時でした。畑道也第 14 代院長が故ブレイ先生の奥様であるフランシスさんを記念式典に招かれ、ご長男のジムさんが付き添われたのです。その 9 年後、お母様を亡くされたジムさんは、奥様とお嬢様と孫娘を連れて来日され、3 月 19 日に関西学院を訪問されました。ご自身が子ども時代を過ごした懐かしいキャンパスと 9 号館を家族に見せたいと思われてのことでした。「ジムは、パッと見はアメリカ人で普通に英語を話すのに、仕草や表情は日本人なので、初めて会った時ビックリしました」と、初対面の私に奥様が告白され、大爆笑になりました。

右は、7 号館の居間と食堂の間の折れ戸に付いていたクリスタル製ドアノブです。解体時、このノブを救出された安永順一さん (元職員) が、その写真と共に現物を学院史編纂室にお届けくださいました。

【学院史編纂室 池田裕子】

★印の写真 3 点 : アン・ケネディさん提供



撮影 : 安永順一さん